**Ⅲ．世代別の価値観と課題**

**那覇市立病院　産婦人科　科部長　池宮城　梢**

2003年に琉球大学を卒業し産婦人科医として勤務。第１、２子は制度を知らず退職して出産し、４カ月で復職した。夫は多忙で不在が多く、ワンオペで育児と仕事に追われた。現在は育児負担が減った一方で仕事量は増え、人員不足と世代偏在を実感している。管理職として多様な働き方の調整が課題で、十分な人員確保と世代の幅が不可欠と考える。女性の改革だけでなく男性の働き方改革こそ真の男女共同参画につながると感じており、今後の議論の深まりに期待している。

**Ⅳ．大切にしてきたこと あくまでも、わたし流**

**沖縄県立北部病院　病院長　佐々木　尚美**

名古屋・東京・沖縄で研修を重ね、「女性である前に一人の人間としてしっかりしなさい」という親の教えと沖縄の文化に支えられ「女性医師」を意識せず働いてきた。責任感と学び続ける姿勢を軸に、患者や家族の声に耳を傾け仲間と連携して成長してきた。管理職となってからは言葉の重さを意識し、相手の強みに目を向け感謝を伝えることを大切にしている。「一流であれ」「楽しく続ける」を指針に、変化を恐れず尊厳をもって人と向き合い続けたい。

**⑵「男性育休の実際と課題について」**

**Ⅰ．男性医師の育休経験から考える働き方改革と働きやすい職場**

**琉球大学病院　産婦人科　助教　平良　祐介**

産婦人科医として子宮頸がん治療に従事し、４人の子の父でもある。第３、４子では先輩の助言を受け約３カ月の育休を取得し、保育園の送迎や家事、上の子のケア、妻の休息確保に努めつつ自己研鑽の時間も得られた。心理的ハードルや収入減の課題はあったが、働き方改革が進む中で育休を取得したことは、家族の満足度向上や業務の属人化解消、離職予防につながり、多様なライフイベントに対応できる職場づくりの一歩だと実感している。

**Ⅱ．自身の育休取得体験**

**那覇市立病院　脳神経外科　医長　下地　　亮**

急性期病院で脳神経外科医として働き、５人の子の父でもある。４人目までは育休を取れなかったが、５人目で必要性を強く感じ１年間の育休を取得。上の子の行事や家事・育児に関わり、実際の負担を体感したことは大きな気づきであった。一方、個人に依存していた業務の引き継ぎの難しさや収入減、男性育休への誤解も経験した。

それでも家族関係と働き方の価値観が大きく変わり、男性育休は誰もが働き続けやすい職場づくりの重要な一歩だと確信している。

**Ⅲ．男性育児休暇―妻の視点から―**

**南部クリニック　西　由希子**

夫婦ともに医師で実家も遠く支援を得にくい中、産後１カ月は自分が休み、その後、生後２～７カ月の間は夫が育休を取得。夫に家事や育児を一から教えたことは負担であったが、育休を通じて夫は育児の全体像や名もなき家事を理解し、自然に役割分担が成立するようになった。収入減や早期復職による負担、また、「男性は褒められ女性は当たり前」という空気に違和感もあったが、夫の育休取得は終点ではなく、家族の基盤を強める出発点だと実感している。

◇

続いて、総合討論ではシンポジストと参加者の間で活発な意見交換があった。

その後、次期担当県の千葉県医師会・寺田副会長より、令和９年４月10日（土）に千葉市にて開催予定であると挨拶があり、盛会裡に終了した。